

# 寺子屋とその師匠

史学班 (徳島史学会)

稲飯 幸生<sup>\*1</sup> 西田 素康<sup>\*2</sup>

**要旨:** 旧美馬町 (重清地区・郡里地区) の寺子屋およびその師匠ならびに寺子屋より小学校への移り変わりをみる。特に山間部では不便な生活のなかで、讃岐との交流などにより教育環境を整えた保護者の努力をみた。また、医師・僧侶など卓越した教養をそなえた人が輩出している事についてその経歴と地域の教育に与えた影響についても調査した。

**キーワード:** 各地域の寺子屋師匠27名を調査。

## 1. はじめに

『日本教育史資料』(明治25年文部省蔵版)によると旧郡里村に5名、重清村に2名の寺子屋師匠が記されているが、『美馬町史』(平成元年・美馬町史編集委員会編)には45名の師匠がある。そのなかには願勝寺・安楽寺などの古い伝統のある寺院の僧侶たちの名もあり、私塾・寺子屋の師匠としてのみならず仏学・漢学の学者としても挙げられている。それらの人々は3名あり寺内で子弟を教え、ここで学んだ人々が地域へ帰って寺子屋を開いている。

## 2. 町内における先覚的学者

### ○美馬正白 (1768~1818)

村の医師について医術と漢学を学んだ後、京都で医術を研修し、さらに長崎にでて外科手法を学び、養子の太玄と江戸に6年間滞在し、後に郷里へ帰り医業を営み私塾をも開いた。

### ○美馬太玄 (1796~1870)

重清村の農家の生まれである儒医美馬正白の子となり、養父とともに江戸に赴き昌平黌に学んだが、その後、さらに医術研究のため和歌山に赴き

名医といわれた華岡青洲について外科法を習得し、備中玉島に住んだが郷里に帰り医業を開いた。医業を子息分司に譲った後は私塾を開き子弟を教えた。

### ○美馬君田 (1812~1872)

願勝寺44代の住職である。美馬太玄について儒学を学びさらに高野山に上って修行し、郷里に帰っては寺内に塾を開き子弟を教えた。天保14年(1843)病気のため還俗して讃岐の琴平に住んだ。君田は博学達識の人で和歌・俳句などに優れていたがとくに知られているのは琴平在住の勤王の志士桂小五郎・高杉晋作・坂本竜馬と交流がありそれらの人々を隠したということで幕府の咎を受け、高松の獄舎に4年間を過ごした。明治4年出獄した後は琴平で私塾を開き余生を送った。この人の顕彰碑が字谷口に建てられている。

## 3. 『日本教育史資料』記載の師匠

学科	所在地	開業	習字師氏名
習字	郡里村	明治45	武田喜市
〃	〃	元治元	藤島喜八
〃	〃	天保末	丸岡理吉

\*1 神山町下分 \*2 鳴門市撫養町

習字	郡里村	明治初	佐伯快淵	浪人	2
〃	〃	慶応元	牧田伊織	医師	3
〃	重清村	文政3	河野大三郎	僧侶	1
〃	〃	文政2	逢坂六郎	神職	3
				不明	9

なお、調査項目として廃業、男女教師、男女生徒、  
 隆生年代、調査年代、身分があるがこの部分はすべ  
 ての師匠が空白である。

#### 4. 町村誌に記載された師匠

○徳島県美馬郡重清村誌（大正6年・1917・重清  
 村職員会編集）

師匠数 男子10名

○郡里町史（昭和32年・1957・郡里町史編集委員  
 会編集）

師匠数	男子	16名
内訳	浪人	2
	医業	2
	農民	11
	僧侶	1



写真1 逢坂一鼎の墓

野田ノ井名で寺子屋を開いた。学制施行後は  
 自宅を学校に開放したといわれる

○美馬町史（平成元年・1989・美馬町史編集委員会）

師匠数	私塾・寺子	男子45名
内訳	農民	25
	医業	2

『美馬町史』に記載されている45名の師匠のなか  
 には『重清村誌』記載の10名の師匠、ならびに『郡  
 里町史』記載の16名の師匠が含まれている。『美馬  
 町史』はこのうち35名の師匠について経歴・活動状  
 況について説明している。年次別にみると最も古い  
 のは宝暦年間であるが文化・文政の頃から多くなっ  
 ている。

#### 5. 何代にもわたって続いた寺子屋

○田中鶴太（父・1798～1879）

文三郎（子・1831～1869）

郡里村東宗重に寺子屋を開き天保から明治に  
 いたるまで続いた。

○寿吉（父・生没年不詳）

八百之助（子・1791～1871）

重清村東原に開く。文政・安政年間である。

○河野大三郎（祖父・1881没）

民三郎（父・1895没）

雄作（子・1898没）

重清村谷口に寺子屋を開く。

○二宮伊勢守・右京・武部（ともに生没年不詳）

重清村八幡に寺子屋を開く。神職。

○藤島岩太（父・1810～1880）

喜八（子・1843～1928）

郡里山村入倉に父岩太が嘉永の頃、寺子屋を  
 開いたが、後に乞われて讃岐の塩江に出て寺子  
 屋を開いた。寺子屋は子の喜八が後を継承し、  
 その寺子屋が入倉小学校となり、喜八はその学  
 校の教師を勤めた。

#### 6. 寺子屋より小学校へ

明治5年学制発布により寺子屋は廃止され小学校  
 が新設されることになったがその転換は町村にとっ  
 ては大きな問題であった。小学校建設事業は財政的  
 にも大きな負担であり、何処にどのような小学校を  
 創設するかということは地域的にも困難な問題も含

み、その建設は遅々として進展しなかった。これは何処の地域でも同様で明治新政府にとっても難しい問題の一つであった。

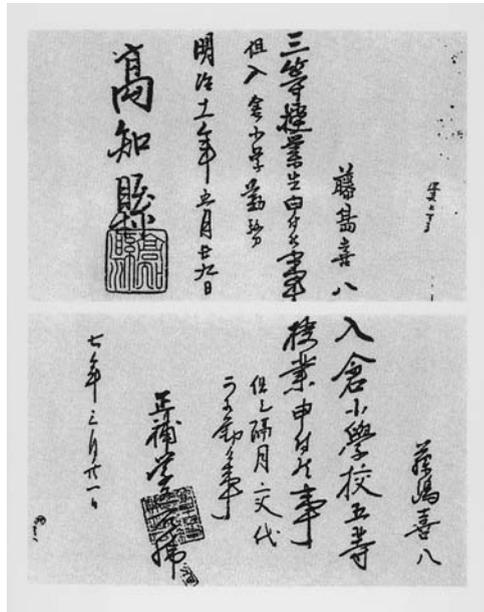


写真2 藤島喜八の辞令  
隔月勤務というのが珍しい

また、寺子屋師匠にとっても大事件であり、子供を持つ親たちにすれば子供の将来を案じることもあった。

『明治8年文部省年表』によれば美馬町には明治7年に次のような12校の小学校が設立されている。

郡里村

喜来小学校	男65	女7名
将順	95	7
宗重	28	5
小長谷	35	3

郡里山村

柴坂小学校	28	5
切久保	35	6
入倉	41	3
条寄	23	15

重清村

野田ノ井小学校	49	2
荒川	17	1
谷口	25	4
竹内	41	5

校舎は1校（宗重校は寺院使用）を除きすべて民

家を借用、教師は野田ノ井小学校の2名を除きすべて男子1名、授業料は無料となっている。

さしあたって寺子屋を小学校と名前を変え、その師匠を教師として任命した例が多い。小学校としての体裁をやや整えはじめたのは明治20年を過ぎてからである。

学制発布直後の状況については次の一部の師匠について調査した。

○牧田伊織（医師・郡里村・1834～1923）

自宅は学制後将順小となり、後に中山路小学校と呼ばれた（明治10年・1877）。

○木村兵次（浪人・重清村・1817～1898）

常念寺を借りて寺子屋を開いていたが学制後は宗重小学校となる

○三好貞右衛門（農民・郡里村・1811～1889）

学制施行後は寺子屋をやめ、郡里山村小学校の巡回教師となった

○井出行衛（医師・郡里村・1828～1883）

寺子屋は喜来小学校となり同校教師となる。

○武田喜市（農民・郡里村・1826～1899）

自宅は小長谷小学校となる。

○藤島喜八（農民・郡里村・1843～1928）

自宅は入倉小学校となりその教師となる。その時の辞令によれば「隔月交代勤務」となっているのが興味深い。

○河野雄作（農民・重清村・1845～1898）

明治13年（1880）谷口小学校と竹内小学校が合併して竹谷小学校となるがその時の校舎は河野家であり、雄作はその教師になった。

○鎌田慶蔵（農民・重清村・1819～1893）

自宅は谷口小学校となり明治7年慶蔵は教師補となった。

○杉山莊三郎（重清村・1855～1915）

自宅は竹内小学校となり、自らは同校教員となった。

○藤原清平（農民・重清村・1838～1918）

自宅が重中小学校荒川分校となる。

○小松速水（儒医・重清村・1823～1892）

讃岐から招かれて藤字名に寺子屋を開いた。自宅は野田ノ井小学校となりその補助教員となった。

○武部勝郎（農民・重清村・生没年不詳）

地域の仏庵を寺子屋として使用していたが、学制発布とともにこの庵が荒川小学校となりその教師となった。

## 7. 寺子屋と重清北小学校の創立経緯

旧重清村の藤宇名・野田ノ井名には幕末からそれぞれに寺子屋があったが、学制改革により廃止され小学校が創立された。それにもなう学校の位置・名称などについて地域間の複雑な経緯があった。これは他町村においてもみられるが重清北小（もと野田ノ井小）の場合はその対応に苦心しているようで、以下その経過を記した。



写真3 長浦蝶遊墓

旧重清村藤宇名で寺子屋を開いた

○幕末より明治初年にかけて旧重清村藤宇名に長浦蝶遊の寺子屋があったが、その死後、讃岐に住む小松速水に対し部落代表が来村を依頼し藤宇名に寺子屋を開いた。速水は漢法医を兼ねた漢学者であった。

○藤宇名の隣接地域の野田ノ井には逢坂幸助が寺子屋を開いていた。

○この地域の二つの寺子屋は廃止され明治7年に野田ノ井小学校が開校した。この学校は藤宇名の小松速水の寺子屋である。学校所在地は藤宇名であるが学校の名称は隣接地域の野田ノ井で

ある。学校の名称・所在地に対する住民の複雑な感情が潜んでいることが窺える。

○明治8年の『文部省年表』によると重清村・郡里村の小学校は11校が記載されているが、そのうち野田ノ井小学校の生徒数は男女合計51名で三番目に多く、しかも教師は他校がすべて1名に対し唯一2名とある。山間部にかかわらず教育に熱心な地域であることが想像される。

○その後も明治25年に村費による校舎が建設されるまで、別記のように2, 3年ごとに藤宇名と野田ノ井名の民家あるいは仏庵を借り受け、二地域交代で学校を開いている。学校移転回数は17年間に11回に及ぶ。野田ノ井小学校は昭和12年に現在の重清北小学校となる。

○野田ノ井小学校の校舎位置の変更

明治8年	(藤 宇)	小松速水宅
〳 3年	( 〳 )	戸島鉄之助宅
〳 14年	(野田ノ井)	逢坂千賀吉宅
〳 15年	(藤 宇)	小松速水
〳 21年	( 〳 )	〳
〳 22年	(野田ノ井)	逢坂庄平宅
〳 23年	(藤 宇)	戸島寿三郎宅
〳 24年	(野田ノ井)	逢坂左馬蔵宅 (野田ノ井) 薬師庵
〳 25年	(野田ノ井)	野田ノ井小学校校舎落成

## 8. おわりに

重清北小学校（野田ノ井小）の創立にみるように寺子屋から小学校の移り変わりは複雑である。寺子



写真4 小松速水寺子屋跡

旧重清村で長浦蝶遊の死後、讃岐から招かれて寺子屋を開いた

屋師匠の存在、保護者の感情、地域の状況など、多様な条件が重なって教育の複雑さが表れている。時代の変転期の一つの事象と言えれば簡単であるが、当事者の苦労を察したい。

### 文献

- 美馬郡郷土誌（大正4年刊・美馬郡教育会）.  
 重清村誌（大正6年刊・重清村職員会）.  
 郡里町史（昭和32年刊・郡里町史編集委員会）.  
 美馬町史（1989・美馬町史編集委員会）.  
 重清北校百年誌（昭和50年刊 重清北校百周年記念事業協賛会）.  
 切久保小学校百年誌（昭和62年刊 切久保小学校創立百周年記念事業実行委員会）.

### 資料提供・協力者

福永 保	美馬市美馬町	東 宗重
荒岡禎一郎	〃	八幡
佐々木芳晃	〃	西段
重清西小学校	〃	八幡
郡里小学校	〃	助松
喜来小学校	〃	天神
芝坂小学校	〃	南原
重清東小学校	〃	大泉
重清北小学校	〃	狙ヶ内
藤島 邦照	〃	入倉
藤島 正昭	〃	清田
逢坂富美子	〃	藤宇
逢坂マツ子	〃	野田ノ井